

# 国語科

## 「国語表現」の学習指導

—59年度の実践報告を中心に—

米 山 誠 白 井 宏 高 木 徹

### 1. まえがき

高等学校学習指導要領の改訂に伴って生まれた「国語表現」の指導を、本校では59年度に、第3学年の必修科目として初めて実施した。試行錯誤的なこの一年間の歩みを、指導の内容・経過、学習に対する生徒の意識等についてまとめてみた。これを、反省資料として今後の指導に生かしたい。また、この報告に対して他校の先生方からいろいろと御教示や御批判をいただきたい。

なお、59年度の1学期末には、100校余の愛知県立高等学校の協力を得て、各校における「国語表現」の実施状況等を調査し、その結果を11月開催の本校の中等教育研究協議会で発表し、協議の参考資料とさせていただくことができた。その調査結果は、本稿の中でも報告させていただいた。ご協力くださった各校の先生方にあらためてお礼申し上げたい。

### 2. 学習指導上の問題点

#### (1) 日常的言語活動に対する生徒の意識

「国語表現」の指導において重要な課題は、生徒の言語に対する関心や自覚を高め、表現意欲を喚起することである。そのためには、当然、生徒の日常的な言語活動の実態に目を向けなくてはならない。その意味で、まず、書く・話す・読む・聞く等の言語活動に対する生徒の意識についての簡単な調査を試みた。当該学年の高3だけでなく、名大附属高校・中学の生徒全員を対象としてアンケートを実施した(59年10月下旬)。以下は、その調査結果である。

① 次の言語活動のそれぞれについて、どの程度、興味・関心・意欲等がありますか。A「文章を書くこと」、B「感想や意見を人前で話すこと」、C「文章を読むこと」、D「人の話を聞くこと」。

高 3	A 書くこと		B 話すこと		C 読むこと		D 聞くこと	
	男	女	男	女	男	女	男	女
非常に強い	名 8 (%) (36)	名 6 (%) (50)	名 7 (%) (24)	名 2 (%) (25)	名 9 (%) (45)	名 9 (%) (67)	名 7 (%) (41)	名 9 (%) (65)
かなり強い	12	25	6	14	16	33	15	32
あまりない	12 (36)	13 (25)	12 (38)	27 (46)	8 (23)	2 (9)	4 (16)	2 (3)
ほとんどない	8	3	9	2	5	2	5	0
どちらともいえない	15 (28)	25 (25)	32 (38)	18 (29)	17 (32)	15 (24)	24 (43)	20 (32)
計	55	63	55	63	55	63	55	63

高1～3	A 書くこと			B 話すこと			C 読むこと			D 聞くこと		
	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年
非常に強い	名 16	名 18	名 14	名 9	名 8	名 9	名 29	名 18	名 13	名 18	名 15	名 16
かなり強い	27	28	37	17	9	20	46	49	49	49	44	47
あまりない	19	23	25	36	42	31	8	18	12	13	15	6
ほとんどない	7	17	11	21	34	11	6	9	7	2	5	5
どちらともいえない	59	44	31	45	37	39	39	36	32	46	51	44
計	128	130	118	128	130	118	128	130	118	128	130	118

中1～3	A 書くこと			B 話すこと			C 読むこと			D 聞くこと		
	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年
非常に強い	6名	8名	3名	5名	5名	2名	20名	19名	10名	17名	11名	11名
かなり強い	17	18	9	10	7	5	26	29	25	32	23	16
あまりない	21	24	27	26	30	20	11	13	13	5	10	6
ほとんどない	6	7	17	13	20	34	2	4	14	2	1	13
どちらともいえない	36	31	28	32	26	23	27	23	22	30	43	38
計	86	88	84	86	88	84	86	88	84	86	88	84

上記の表によって、興味・関心の高い方から順にあげると、1位はC「読むこと」で、高校全体で56%、中学全体で50%。2位はD「聞くこと」、高校50%、中学43%。3位はA「書くこと」、高校36%、中学24%。4位はB「話すこと」、高校19%、中学13%である。逆に、興味・関心の低い方から順にあげると、B「話すこと」、高校48%、中学58%。A「書くこと」高校28%、中学40%、C「読むこと」高校16%、中学26%、D「聞くこと」高校12%、中学15%となる。要するに、高校生にも中学生にも、「話すこと」、「書くこと」は、「読むこと」、「聞くこと」に比べて、抵抗感の強いことがわかる。

「国語表現」を学習する高3についてみると、B「話すこと」は、興味・関心のある者が、「非常に」、「かなり」を合わせて、男子24%、女子25%。興味・関心のない者は、「あまり」、「ほとんど」を合わせて、男子38%、女子46%である。また、「書くこと」は、興味・関心のある者、男子36%、女子50%。興味・関心のない者は男子36%、女子25%である。

② 日常の言語活動において困ること、悩むことがありますか。あれば、簡単に書いてください。

この問いに答えた者の人数は少なく、中学生が25%程度、高校生が10%程度であった。その答えについてみると、第一に、「話すこと」に関するものが圧倒的に多い。次に「書くこと」、そして「読むこと」の順で、「聞くこと」に関してはほとんどない。以下、主な答えを列挙してみよう。

○「人前で緊張して自分がしゃべっていることがわからなくなったりする」、「頭の中で考えていることをうまく口で表現できない」、「意見など話すとき何を話せばいいかわからない」、「無口で困っている」、「思ったことと違うことを言うてしまうことがある」。

○「名古屋弁はバカにされる」、「名古屋弁でしゃべりたくないのに、つついそれが出てしまう」、「直そう直そうと思ってもどうしても名古屋弁がでてしまう

ことが悩みの一つ。直せるでしょうか」。

○「先生や先輩に対する尊敬語の使い方に困る」、「日常話すことばづかいがわるい」、「流行語がくせになってしまった」、「ことばがどもる」。

○「作文が苦手」、「心で思っても文章にできないとき悩む」、「丸字に困っている」。

○「朗読するとき緊張して上手に読めない」、「読むのがおそい」、「むずかしい漢字がでてくるとうんざりする」、「知っている語い数が少ない」。

## (2) 現実的な諸問題

言語活動に関する以上のような実態に即して、「国語表現」をどう指導したらよいか。表現への興味、関心、意欲、自覚等を高め、実際的な技術、能力を身につけさせるのにはどう指導したらよいか。結局、生徒各自に実際に文章を書かせたり、感想、意見を話させたりする機会を多くすること以外に効果的な方法はありません。そのためには、書き、話し、読み、聞く等の言語活動を学習の場で生き生きと関連させながら、総合的な国語教育を計画し、実践していかなければならない。

従来、長年にわたって作文教育の緊要性が叫ばれ続けながら、事実上、肝心の教育現場では、一般的にみて本格的な実践は進められていなかったといつてよいだろう。その原因は、授業時間数、生徒数、教師数、予算等の教育条件の不備、また、作文処理や成績評価の方法の未熟さ、あるいは、読解中心の入試対策に追われる生徒と教師の作文への無関心等々が重なっていたからである。しかし、今日、新指導要領によって「表現」重視の国語教育が具体的にうち出され、「国語表現」の教科が生まれたけれども、教育条件の不備、指導方法の未熟さ等の問題はほとんど解消されてはいない。ただ、入試において、小論文や面接が重視されるようになり、その必要性からの関心もたれるようになってきた。いずれにしろ、作文教育を主とする「国語表現」の指導にあたって、担当教師は開拓者的

な姿勢で毎時間の授業に取り組まなくてはならない。

### 3. 59年度学習指導の実践

#### (1) 本校の59年度国語科カリキュラム

教科	科目	1年	2年			3年		
			共通	文系	理系	共通	文系	理系
国語	国語Ⅰ	5						
	国語Ⅱ		4					
	国語表現					2		
	現代文					3		
	古典			2			2	

#### (2) 指導方針

- ① 実際に文章を書かせる機会を多くする。
- ② 話しことばの指導も積極的に行う。
- ③ 教科書以外に多様な教材を用い、読むこと、書くことへの意欲を起こさせる。

#### (3) 国語科の指導体制

- ① 第3学年A・B・Cの3学級を、3名の教師が、1名1学級ずつ担当する。(A組=米山, B組=白井, C組=高木)。
- ② 指導の内容, 方法等については、3名の担当教師が毎週打ち合わせをして歩調をそろえるようにする。また、国語科教師全員の理解・協力によって、無理がなく長続きの可能な指導体制を工夫する。

#### (4) 教科書

各社の教科書を比較してみると、編集方針に大体、三つの類型があるように思われる。

④ 文例集型……角川。

⑤ 書き方ハンドブック型……旺文社, 筑摩, 尚学。

⑥ A・B折衷型……三省堂, 明治, 東書, 大修館。

教科書(本校では「角川」版)の扱い方としては、「現代国語」の場合と似た形になるが、表現や文体の特徴、題材の扱い方、筆者の個性や視点等に注意を向けさせる。

#### (5) 原稿用紙

3種類の本校特製の原稿用紙(400字, 600字, 800字, 横書き, 縦書き)を用意し、作文の種類に応じて活用する。

#### (6) 年間指導計画の概略

年間を通じて、なるべく各種の文章を読ませたり書かせたりすることを考えた。とっつきやすい身近な内容の文章から次第に論理的な内容の文章へと進めていくことも考えた。教科書の教材配列を参考にしながら、教科書以外に適切な文章や資料をなるべく豊富に選んで使用することにした。

4月	日記文	9月	論説文の要約
5月	スピーチ, 小論文	10月	記録文, 報告文
6月	小説鑑賞	11月	意見文, 感想文
7月	手紙文	12月	スピーチ
8月	手紙文の課題	1月	スピーチ, 小論文

#### (7) 学習指導の実施経過(59年4月~60年1月)

時	指導内容	教科書(角川)教材	自主教材
第1時 (4/10)	①「国語表現」についての説明(20分) ・科目の意義, 目的, 性格 ・授業の方針, 学習方法, 年間計画, 教科書の扱い方等。 ② 第1回作文(日記文) 「59年4月9日(始業式当日のこと)」という題の日記文を書かせる。・字数600字~700字, ・時間30分以内。	・「原稿用紙の使い方」	・「日記考」(大内力) (「朝日新聞」1981.8.24 「日記から」)
2~4時 (4月)	①日記についての説明, 生徒の話し合い。 ②日記文の鑑賞	・「敗戦日記」(高見順)	・「日記(やさしい情報整理学) (甲斐清通) ・「本隊の最後(世界最悪の旅・南極探検)」(R. スコット) ・「青春日記」(大宅壮一) ・「本校生徒の日記に関する実態調査」資料
5~8時 (5月)	①日記文の鑑賞 ②第1時に書いた生徒の作文, 約10編を紹介。 ③添削し, 簡単な批評を加えた生徒の日記文を個人別に問題点を指摘しながら返す。	・「塵の中」(樋口一葉) ・「一葉の大音寺前の生活」(宮本百合子) ・「日記と記録」(梅棹忠夫)	・樋口一葉の日記「水の上の日記」(明治29年5月2日)

「国語表現」の学習指導

9 ～ 12 時 (5 月)	①スピーチの意義について説明し、生徒の日常的な言語活動の実態や感想を話し合わせる。 ②教材の通読と感想発表。 ③生徒教名のスピーチ(自由題)と、それに対する他の生徒の批評。(スピーチの内容は原稿用紙に書かせて提出させ、また、スピーチはテープに録音した。)	・「Aさんから学んだこと」(54年度全国定時制高校生活体験発表大会で発表された生徒作品) ・「聞き取りやすい話し方」(音声面の注意)	・「青春」(小論文参考書所載の生徒作品例)
13 時 (6 /1)	○1学期 中間テスト (小論文) ・題目「私の長所と短所」 ・字数 500字～650字 ・時間 50分 ・注意 平明さ、全体としてのまとまり、段落、文字の正確さ、句読点等への配慮。		
14 ～ 17 時 (6 月)	○小説鑑賞(教育実習生の授業) 作品を読んで感じたことや考えたことを自由に話し合わせる。(特に表現の特徴に注意させる。)	・「蠅」(横光利一) ・「視点を変えて」	・「新感覚派の人々と横光利一」, 「新感覚派の文体」(浜島書店「常用国語便覧」)
18 ～ 20 時 (6 月)	①講演の録音を聞いてメモをとらせる。すぐれた話し方の魅力を味わわせる。また、日本語の特徴について考えさせる。 ②生徒教名のスピーチ(自由題)。 ③新聞の社説を読む。文中の漢字の書取り。		・「日本語の魅力」(金田一晴彦氏の本校での講演の録音) ・「自然を表す語彙」(金田一晴彦「日本語の特質」より)
21 時 (7 /3)	○期末テスト(教科書教材「敗戦日記」, 「塵の中」, 「蠅」の読解を中心としたテストで、記述式説明や漢字書取りの設問を多くする。)		
22 ・ 23 時 (7 月)	①中間テスト小論文の答案(添削して批評を加え、評点を記した)を個人別に説明しながら返す。期末テスト答案も返す。 ②評論文の読解、鑑賞(散文精神の本質について考えさせる)	・「散文精神について」(広津和郎)	
24 時 (7 月)	①手紙文の鑑賞と書き方の学習。 ②夏休みの課題(「国語表現」担当教師宛に近況報告、現在の心境、将来への思い等を知らせる手紙を書くこと。形式は縦書きの標準的な便箋で3枚以上。縦長の標準封筒を使用すること)。	・「花を見る」(三浦哲郎晶子)の前半。 ・「手紙の書き方」(中村汀女) ・「心のこもった手紙」 ・「封書、はがきの表書き」	・明日と思わず、今書く(外山滋比古) ・入試問題の「手紙文」出題例(「大学受験を恩師に知らせる手紙」)。 ・「手紙の形式」「よい手を書くには」等の資料。
25 ・ 26 9 時 (9 月)	①夏休み課題の生徒の手紙についての批評。 ②手紙文の鑑賞	・「花を見る」の後半。 ・「無用の用」有島武郎の手紙(佐々木幸綱)	
27 ・ 28 時	①新聞の社説通読及び文中の漢字書取り。 ②社説の要約文を書かせるテスト(300字～400字, 30分間)。		・「朝日新聞」社説(59.8.15)「八月十五日の今日的意味」
29 ～ 31 9 時 (9 月)	①手紙文鑑賞(「無用の用」の続き) ②有島武郎の文学鑑賞(「小さき者へ」) ③生徒スピーチ(「学校祭のこと」など)	・「無用の用」有島武郎の手紙(佐々木幸綱)	・「小さき者へ」(有島武郎) ・「一行詩の往復」(扇谷正造) ・「無口な手紙」(向田邦子)
32 ～ 35 10 時 (10 月)	①記録、報告文の読解、鑑賞(教科書教材)。 ②「国語表現」の学習に関する調査(アンケート)実施。 ③中間テスト(課題小論文)予告。教科書教材を参考にして考えさせる。	・「わたしと飛行機」(古在由重) ・「暑い夏」(中野孝次) ・「自己を見つめる」	・「朝日新聞」の「声」欄(59.8/3,8/24)の中学生、高校生の投書記事8編。

36 時10 /17	2学期中間テスト(小論文) ・課題 「私と_____」 ・字数 600字以上800字以内。 ・時間 50分		
37 /40 時 (10月)	①「天声人語」(朝日新聞)を読み、感想・意見を発表させる。文中の漢字書取りテスト。 ②漢字四字熟語の学習(読み、書取り、短文作り)。 ③四字熟語テスト(第1回)		・「朝日新聞」(59.10/1,10/5)の「天声人語」(文部省の学力調査の国語問題に関する内容)。 ・「漢字四字熟語集」
41 ・42 時 (11月)	①四字熟語テスト(第2回) ②評論文の読解、鑑賞(教材を通じて、類推の思考方法、隠喩の表現方法を学ばせる)。	・「魔女の歌」(伊藤整) ・「内面を探る」 ・「比喩」	・「朝日新聞」社説(53.10.27)「ゆったりと読書を楽しむ秋」
43 /47 時 (11月)	⑥四字熟語テスト(第3回) ②論説文の読解と鑑賞(自分や自分を囲む時代の現実の問題意識をもたせ批評意識を養う。そして自分の意見や主張を自主的に文章にまとめさせる)。 ③生徒スピーチ(生徒の考えた問題についての意見・主張を生徒の前で発表させる)。	・「ひめゆりの乙女たち」(天声人語) ・「現代饒舌考」(稻垣吉彦)	・本校生徒文集から3編(「兵器としての核とエネルギーとしての核」,「学歴社会の中で思うこと」,昭和20年の中学二年生) ・「朝日新聞」(54.11/9~13)の「日記から」(杉捷夫)―「ちっともだめだ」,「日本語の乱れ」等―。
48 ・49 時 (12月)	①中間テストの答案(小論文「私と_____」)を個別的に簡潔に説明しながら返却。 ②四字熟語テスト答案返却。 ③テストに関する質疑応答。 ④あいさつに関する「天声人語」の文章を読ませ、言葉使いについて考えさせる。		・「天声人語」(50.2.17) ・「朝日新聞」社説(55.12.28)「テレビ時代の読書」
50 時12 /8	○期末テスト(教科書教材「魔女の歌」,「無用の用」の読解、鑑賞を中心として、記述式説明や漢字の書取りの設問を多くする。		
51 /53 時 (12月)	①テスト答案返却。 ②論説文(教科書教材)の読解と鑑賞。 ③読書に関する新聞の社説の読解。	・「生きて今ここにいることを手放すまい」(中井正一)	・「朝日新聞」社説(58.10.28)「読むということ」
54 時 (1月)	①小論文を書かせる(課題「珍獣ブームについて思うこと」,400字程度,30分間。2学期末、学級活動として東山動物園へコアラ見学に行った時の感想をもとにして書くこと)。 ②新聞社説「珍獣ブームに考える」を作文の後で読ませる。		・「朝日新聞」社説(59.10.28)「珍獣ブームに考える」
55 /57 時 (1月)	①新聞社説の読解、漢字の書取り。 ②「珍獣ブームに思う」の小論文の教編を学級の全員に紹介し批評する。添削した作品を全員に返却する。 ③生徒スピーチ(年間を通じて各クラス全員にスピーチを体験させる計画で1・2学期に何回か実施したが、約半数の生徒が残っていたので、それらの生徒全員に行わせた)。 ④「国語表現」学習に関するアンケート実施	・「聞き取りやすい話し方」(表現の手引) ・「句読点の打ち方」	・「朝日新聞」社説(59.1.1)「現実をふまえた理想主義の道」
58 時1 /30	○学年末テスト(小論文) ・課題 「私と名大附属高校」 ・字数 400字以上600字以内。 ・時間 50分		

### (8) 作文の指導と評価の方法

評価に用いたものは、次の①～⑤である。

① 2回の小論文(作文)。② 2回のテスト。③ 手紙。  
④ 社説の要約文。⑤ 四字熟語のテスト。それらについて、順次説明して行く。

① 1学期と2学期の中間テストに代わるものとして文章を書かせ、各50点(5段階で付け、10をかける)として評価に加えた。正確を期するため、3人の教師が、受け持っていないクラスの分も含め、3クラス全部の文章を読み、5～1の5段階で付けた。

細かな項目ごとに点数化して評価する方法も考えられるが、例えば漢字の扱い一つを取ってみても、誤字1字につき1点減点とした場合、同じ字を何回も間違えているのはどうするか、むずかしい字は使わないで平仮名ばかりで書いているのはどうするか、など扱いにくい問題がいくつも出て来るので、結局、内容・表現などから総合的に判断して、大きく5段階で付けることになった。

3人の教師は、それぞれ他の教師の評価を見ないで評価を決め、最後に3人の評価をつき合わせた。評価が一致しない場合、3・3・4は3に、3・4・5は4にした。3・3・5と評価が分かれる場合は扱いに困るのだが、こうした例は少なかった。また、2・3・5とひどく評価が割れるようなことは一度もなかった。

3人による評価は、一人の教師の好みに左右されないということで生徒も納得していたようだが、3人の評価をつき合わせてみると、そう大差はないという印象を持った。評価する者によって、全体的に甘めか辛めかという違いはあっても、A君の文章に対する評価と、B君の文章に対する評価が、人によって逆転しているというような場合はごくわずかだった。そこから考えると、3人の教師が生徒全員の文章を読むという方法は、正確ではあるが非能率的であり、必ずしも必要でないかもしれない。このやり方では、どうしても評価に時間がかかるので、文章を書かせて評価する機会を増やし、3人が交替で評価して行く方法も考えたらどうか、という反省が年度途中に出て来て、③～⑤については、一人で評価を行った。

② 1学期と2学期の期末テストとして行ったもので、各50点満点である。教科書の読解を中心とした、「現代文」のテストに近いものであったが、漢字の読み書きや、文章で答える形の問題を多くして、国語表現的色彩を出した。

こうしたテストを行った理由は、授業のかんりの部分で教科書を使用していたが、そうした授業がテストや評価に直接結び付いて来ないと、授業が成り立ちに

くくなるのではないかという心配があったからである。しかし、こうしたテストや、それを前提とした授業が、生徒に「国語表現」と「現代文」の授業の違いをわかりにくくさせていたと思われるので、今後は、例えば教科書の内容理解に基づいた文章を書かせるなどして、「国語表現」という科目の性格を明確にして行けたらと考えている。

③ 夏休み中の課題として書かせたものだが、質・量ともに充実しているものが多かったので、50点(5段階で付け、10をかける)として評価に加えた。

④ 新聞の社説を授業の中で読み、それを1時間かけて要約させ、25点(5段階で付け、5をかける)で評価に加えた。この場合は、押さえるべき点をはっきりしていたので、他の文章に比べると評価は容易であった。

⑤ 四字熟語のプリントを配布しておいて、四字熟語の穴埋めと、それを使った短文作りを出題し、3回にわたってテストを行った。その合計点を40点に換算して、評価に加えた。

#### <今後の課題>

「国語表現」という科目の特性を生徒にもよく理解させるために、できる限り多くの“表現されたもの”を評価に加えて行く必要がある。その際には、“書かれたもの”が中心になるが、漢字・短文から始まり、200字程度の作文、400字をこえる小論文、さらには原稿用紙何枚にも及ぶ文章など、多種多様なものに生徒を取り組ませ、評価に含めて行きたいと考えている。

残された大きな問題は、「話すこと」をどう評価するかである。国語表現の授業の中で、ほぼ全員がスピーチを行った。そのすべてとは言えないまでも、きちんとした原稿を用意し、かなり内容のあるスピーチを行った者も多く、今回は評価に加えられなかったが、今後は何らかの形で評価して行く必要があるだろう。その際に問題になるのは、一つは担当する教師によって評価に差が出てくるのではないかということであり、もう一つは、1時間に2、3人ずつスピーチを行ってゆくと、全員がスピーチを行うには2ヶ月以上もかかるので、一人の教師の中でも評価の基準にゆれが生じてくるのではないかということである。全員のスピーチを録音して聞き直すという方法ではあまりに時間がかかるので、スピーチの原稿を提出させ、それを参考資料として評価して行く方法などを考えている。

昭和59年度において、「国語表現」の評価は、315点満点で行った。そのうち、「書くこと」についての評価は約6割含まれている。残りの4割では、国語表現らしくないものも評価されているので、今後はそうした

部分を極力減らし、代わりに「話すこと」を評価して行けば、「国語表現」の評価として望ましい形になってくるであろう。

#### (9) 小論文・面接の個人指導

大学受験や就職試験で、小論文や面接が課せられる生徒については、個人指導を行った。

○小論文指導……一口に小論文と言っても、「高校3年間で心に残ったこと」、「体育祭について」といった作文的なものから、「情報化社会における個性と多様性」、「民主主義社会における多数決の目的」といった固い題のものまである。

また、文章を読ませて論じさせたり、文章を要約させた上で論じさせる形のものもしばしばあり、その中には、表現以前にかなり高度な文章読解力が要求されるものも含まれ、表現面の指導だけでは対応できないという印象を持った。ただ、こうした出題は総合的な国語力が必要とされる点で、高校教育の側から見ると、好ましい出題ではないかと思う。

指導の中身は、文章を書かせて提出させ、添削した上で生徒を呼び指導する形で、特別なことはやっていない。繰り返し指導するうちに、文集表現は整って行くが、内容の貧弱な点や視野の狭さについては、短期間では指導できないまま残された。こうした点は、豊かな読書体験や社会的関心の基盤がないことには指導できないもので、常日頃の読書指導等の重要性を再認識させられた。

○面接指導……面接を必要とする者について、担任教師とそのクラスの「国語表現」を担当する教師を含め、三人くらいで行った。ありふれた質問でもとまどったり、答え方が不十分であったりする生徒が多く、自分自身の言葉を用いて、他人が理解できるように論理的に話すことが、かなりの生徒には困難なようであった。

面接指導の中で感じたことは、普段の授業の中でははっきりとした受け答えのできる生徒については、特別に指導の必要もないくらいで、逆にそれができていない生徒については、指導が困難で、付け焼刃に過ぎないのではないかという印象を受けた。

昭和60年度入試の小論文の出題・面接の項目については、生徒に調査用紙を渡して記入させ、これからの国語表現の授業や、小論文・面接指導に生かして行く考えである。ただ、小論文にしても面接にしても、高校教育全体の成果を見たいという意図のあらわれであり、それに対応するためには、国語表現の授業や個人指導はあくまでも仕上げであり、高1からの国語や他の教科の授業の中で、さらには学校生活全般を通して指導して行く必要がある。また、そうした指導は、受

験等で小論文や面接を必要としない者にも、行われるべきことであろう。

#### (10) スピーチの指導

国語表現の中でも、話し方、音声表現の指導は、とりわけ遅れている。高校生の日常の話し方は、文章以上に貧しく、かつ乱れており、その指導の必要性は、誰にも痛感されているのだが、実践例の乏しさ、評価法の未確立など、これまた作文教育以上である。しかし、国語表現という科目を実施する以上、この話し方の指導を避けて通るわけにはいかない。今述べたように、貧困な言語生活の現状を認識反省させると同時に「面接」が「小論文」と並んで、いろいろな所で課せられ始めているという、現実的要請もあるからである。

私どもは、話し方学習の実践として昨年「スピーチ」を採りあげた。その理由は、次に示すように、他の形態に比べて比較的容易であり、話し方学習の入門として適切であろうと考えたからである。

- ① 講演や意見発表を「評論」や「論説」にたとえるなら、スピーチはいわば「随筆」であり、身近な出来事や日頃思っていることを素材として、比較的気軽に取り組めること。
- ② 討論や議論の場合は、相手の発言をその場で理解し、それに対して自分の考えを素早くまとめなければならぬという難しさがあるが、スピーチの場合は、自分ひとりが一方的に話すので、事前に十分な準備ができ、自分のペースで話すことができる。

次に、このスピーチ単元の実施内容を示す。

#### ① 教科書教材を読む

教科書には、「Aさんから学んだこと」(1979年度全国定時制高校生活体験発表大会における入選スピーチ)と、「散文精神について」(作家広津和郎による『人民文庫』主催の講演会における講演の覚え書)という2つの、スピーチの実例文教材が載せられている。これらを、話の内容と、それに即した話の進め方を観点として読んだ。

#### ② 実際のスピーチを聞く

高橋信吉の「わが師萩原朔太郎について」という講演(というより自由な回想、NHKラジオより収録)のテープを、メモを採りながら聞く。メモ用紙は、話題の主要な項目をプリントしたものを教師が用意し、テープを聞きながら気付いたことをそれに書き込ませるといった方法をとった。

#### ③ 各自がスピーチをする

注意するポイントとして、話の内容、話し方(技術と態度)、聞き方(態度と批評)という3点を予め明示し、次のような手順で実施した。

- ア 一人のスピーチの時間は、約3分間とする。  
 イ 話のポイントを3点にまとめ、そのメモを事前に提出する。(当日はそれをプリントしたものを全員に配る。)  
 ウ 3分間は、原稿用紙約3枚文の分量であり、その原稿をなるべく用意する。  
 エ 原稿を手許に置くのはよいが、朗読をしない。  
 オ 姿勢・視線・スピード・音量・イントネーションなどに気を配る。  
 カ 聞く者は最初と最後に拍手をする。  
 キ 話の後、何人かの者がそのスピーチについての感想・批評を述べる。  
 ク 本人も事後に感想を簡単に述べる。  
 ケ 最後に教師がまとめの批評をする。

このような要領で、1時限7人程度ずつ実施した。その結果を、感想の形でまとめておく。

- ① 1年間の「国語表現」の授業の中では、最も活気ある、「表現の授業」らしいものになった。
- ② 原稿を持ったために、朗読にはならないまでも、文体が、話し言葉のそれではなく、つい書き言葉のそれになるものが多かった。
- ③ 慣れていないため、聞き手の方に目を向け得ず、やや固くなる者が多かった。
- ④ 聞き手の感想・批評は、「大変良かった」式の発言がほとんどで、批評にまで至らなかった。
- ⑤ 面白おかしく話そうという気持ちや態度が話者にあり、聞く側にもそれを期待し、かつ喜ぶという風がやや強すぎる場面もあった。
- ⑥ 事前提出メモが簡単すぎ、スピーチの内容をそれから予想することが難しいものがほとんどであった。

最後に、その事前提出メモの数例を次に紹介して、この項を終えることとする。

A 「目的」

- ① 何故大学へ行くのか
- ② 親の気持ち
- ③ 自分の敷いたレール

B 「私が思う“母親”」

- ① 電車の中でのある母子の会話
- ② 私が「なりたくない」と思う母親
- ③ 母親の重要性——何故今勉強しているのか

C 「夢」

- ① 眠っている時に見る夢
- ② 夢の中の自分
- ③ 将来の夢

D 「僕の顔」

- ① 僕の目

② 僕の鼻

③ 僕の口

#### 4. 学習に対する生徒の意識

上記のように実施した「国語表現」の学習指導に対して、学習の主体者である生徒たちはどのような受けとめ方をしたであろうか。この新教科への認識、興味、関心、表現能力の自覚等の程度を知るために、2学期半ばと学年末と2回のアンケートを行った。以下は、学年末のアンケートの結果である。

○調査対象 3年生全員(当日欠席者を除く)

117名(男子56名・女子61名)

○時期 60年1月28日

○方法 A・B・Cの各組において同一のアンケート(無記名式)を実施し、その結果は学年全体、及び男女別に集計した。

A. 「国語表現」という科目の意義や必要性をどの程度感じますか。

	男	女	計
	名(%)	名(%)	名(%)
非常に強く感じる	6 (11)	10 (16)	16 (14)
かなり感じる	12 (21)	16 (26)	28 (24)
あまり感じない	9 (16)	16 (26)	25 (21)
ほとんど感じない	13 (23)	1 (2)	14 (12)
どちらともいえない	16 (29)	18 (30)	34 (29)
計	56	61	117

「意義・必要性を感じる」は、「非常に」「かなり」を合わせて38%。「感じない」は「あまり」「ほとんど」を合わせて、33%である。男女別にみると、「感じる」は、男子32%、女子42%。「感じない」は男子39%、女子18%。男子より女子の方が意義、必要性を認める割合は高い。なお、資料は省略したが、第1回の調査(10月)に比べると、「感じる」は22%から38%へ、「感じない」は46%から33%へと変化した。

<意義、必要性を感じる主な理由>

- ① 「手紙の書き方などふだんの授業ではやっても学べないことを学べるから」、「日常的な文章から小論文まで自分一人ではやれないことを学べるから」、「書くことの苦手な者にとっては書くことのよいきっかけになるから」等。
- ② 「入試の小論文の勉強になるから」等。
- ③ 「これまでの国語ではテストのために問題



を解いたりすることが多かったが、この科目は自分のためになる、本当の国語のような気がする」、「先生中心ではなくぼくたちがやっているという実感がある」等。

＜意義、必要性を感じない主な理由＞

①「目的が漠然としていて何を問題としてよいのかわからない」、「現国の時間のようであり、作文の時間のようであり、ゆとりの時間のようでもある」等。

②「入試に必要がない」等。③「無意味」等。

B. どの程度、興味・関心がありますか。

	男	女	計
	名(%)	名(%)	名(%)
非常に強く感じる	5 (9)	8 (13)	13 (11)
かなり感じる	10 (18)	15 (25)	25 (21)
あまり感じない	8 (14)	16 (26)	24 (21)
ほとんど感じない	18 (32)	3 (5)	21 (18)
どちらともいえない	15 (27)	19 (31)	34 (29)
計	56	61	117

「興味を感じる」は、32%、「感じない」は39%で、「感じない」の方が多い。男女別にみると、男子は「感じない」の方が多いが、女子は「感じる」の方が多い。なお、第1回の調査結果は、「感じる」は、男子18%、女子24%、計21%。「感じない」は、男子58%、女子35%、計46%であった。Aでもみたように、年間の学習を経て、徐々に、この教科に対する理解、興味、関心が増してきたものと言えよう。

＜興味・関心のある主な理由＞

①「たのしい」、「プリントして配ってくれる教材に興味がある」、「文を書くことが好きだから」等。②「作文・論文・手紙など書くときのルールやマナーを知ることができる」、「論理的に物事を書き表したり言ったりすることが得意ではないので、それらを養うのにこの学習は適していると思う」等。③「受験科目として関心がある」等。

＜興味・関心のない主な理由＞

①「この科目を学んだからといって文章がうまくなることは全くない」、「表現力が身につくかどうか疑問だし、スピーチだって少しやったくらいでは上達できない」、「小論文の書き方をもっといねいに指導してもらえなかったが期待はずれ」等。③「学習の目的があいまい、意義がわからない」、「教師の教え方があいまいな感じだ」等。④「国語がきらいだから」、「作文がきらい」、「勉強自体がきらい」等。⑤「入試に関係ないから」、「特に必要性を感じない」等。

C. 学習に困難を感じるがありましたか。

	男	女	計
	名(%)	名(%)	名(%)
あった	22 (39)	21 (35)	43 (37)
なかった	24 (43)	27 (44)	51 (44)
わからない	10 (18)	13 (21)	23 (19)
計	56	61	117

第1回の調査では、「困難を感じた」は、男子29%、女子25%であったが、今回は、39%と37%とでそれぞれ10%増加している。これは、作文、スピーチ等の体験を積むことによって、実際的な表現の難しさを知った結果と思われる。

＜主な困難点＞

①「スピーチになれていないこと」、「スピーチの題材選び」等。②「論文・作文を時間内にまとめること」、「論文の題材を選ぶこと」、「考えを練ること」、「文章は短期間で上達しないような気がするし、内容の濃いものとするのには深い知識がいる」、「表現以前の問題として自分自身の考えをもつことが少ない」、「漢字が苦手」等。③「教材の目的があいまい」、「文章を書く時間や機会のもち方に困る」等。

D. 読解と鑑賞の学習を行った下記の各種の文章の中で、自分にとって特によい勉強になったと思われるものを選んでください。

(イ) 日記 (ロ) 小論文 (ハ) スピーチ、講演 (ニ) 小説鑑賞 (ホ) 手紙 (ヘ) 論説文(社説など)の読解や要約 (ト) 記録・説明文 (チ) その他

①手紙 54名、②スピーチ・講演 49名、③小論文 48名、④論説文の読解や要約 20名、⑤日記 5名、⑥小説鑑賞 4名、⑦記録・説明文 3名、⑧その他(四字熟語など) 6名。

E. 教科書及びプリントの教材の中で非常に印象に残ったものがありますか。あれば、その題名、作者名等を記してください。

①社説・天声人語 13名、②「蠅」(横光利一) 11名、③「日本語の魅力」(金田一春彦の講演) 4名、④「小さき者へ」(有島武郎) 3名、③「魔女の歌」(伊藤整) 3名、⑤「無用の用」(佐々木幸綱) 2名、⑤「無口な手紙」(向田邦子) 2名、⑥本校の生徒の文章 2名、⑦その他(「一葉の日記」、「手紙の書き方」、「親子の手紙」、四字熟語) 4名。

F. スピーチに対して、どの程度興味・関心がありますか。

	男	女	計
	名 (%)	名 (%)	名 (%)
非常に強く感じる	12 (21)	8 (13)	20 (17)
かなり感じる	13 (23)	25 (41)	38 (32)
あまり感じない	13 (23)	7 (11)	20 (17)
ほとんど感じない	7 (13)	6 (10)	13 (11)
どちらともいえない	11 (20)	15 (25)	26 (22)
計	56	61	117

「興味を感じる」は、「非常に」、「かなり」を合わせて約50%、「感じない」は33%である。これは、年間の授業を通じて全員が一度ずつスピーチを体験した結果とあってよい。本稿の最初に記した調査資料では、「話す」ことへの興味・関心を持つ者は25%に過ぎなかったのに、こうして学年末の調査では50%に倍増していることは注目すべきことである。

G. 学習によって自分の言語活動に対する認識が深められたり、態度や能力が向上したり等の成果があがったと思いますか。具体的にはどんな成果ですか。

	男	女	計
	名 (%)	名 (%)	名 (%)
思う	11 (20)	19 (31)	30 (26)
思わない	27 (48)	14 (23)	41 (35)
わからない	18 (32)	28 (46)	46 (39)
計	56	61	117

第1回の調査では、「成果があがったと思う」は、男子16%、女子19%、計18%。「思わない」は男子58%、女子33%、計42%であった。成果があがったと思う者が18%から26%に増えたとはいえ、表現力の向上などは実感しにくいのであろう。

<成果があがったと思うこと>

「文章を書くことに対する抵抗が少なくなった」、「人に手紙を書くときにとまどわなくなった」、「短時間で大体のあらすじを考え、文章を構成していけるようになった」、「小論文をかくようになって、ある程度、その書き方を学ぶことができたし、以前よりは自信がついてきた」、「自分の気持ちを人に伝えるだけでも、他の人のスピーチを聞いて様々な方法があることがわかってうれしい」、「スピーチや小論文によって自分の考えをまとめることができるようになった」、「小

論文によって自分の言葉で表現することのむずかしさがわかったり、書き方がわかったりしてよかった。またスピーチで人の考え、意見を聞いてよい参考になった」、「日記の大切さがわかったり、手紙を書くうえで常識がわかり大変助かりました」、「日本語について深く考えることが多くなった」等。

H. 授業についての感想・意見などを自由に書いてください。

①「文章を書くことの大切さを知った」、「文章を書くのは大変めんどろだからとていやだったけれど、やはりやってよかったと思う」、「小論文が有意義だった」、「もう少し具体的な小論文の書き方を説明してくれなければ、ただ漠然と書くだけでは、いくら授業やテストをしても効果が上がらないし、受験にも大して役にたたないと思う」、「漢字の練習をもっとしてほしいかった。二字熟語も勉強したかった」等。

②「スピーチはたのしかった」、「人前でスピーチなんてはじめてやった。よい勉強になった」、「スピーチをもっと取り入れた方がよい。自由題もよいが、題を与えて、それについて数人にスピーチさせ、それをもとに皆に討論させると、表現の授業として効果があるし、おもしろいと思う」、「型にはまらない本校らしい自由な表現の仕方を開発させるべきだと思う。きれいな文より個性的な文を書くようにしたい」等。

③「プリント教材をたくさん使い、実になる勉強ができてよかった」、「教科書が必要ないような授業も可能であると思います。今後そのような方向で考えてみてはと思います」、「日常生活にとっても役に立つ授業であり、楽しかったし、有意義だった」、「後輩にもぜひすすめてほしい授業です」、「日本語に対する感覚が磨かれてプラスとなった」等。

5. 愛知県公立高校における「国語表現」の実施状況

(1) 調査目的——選択教科である「国語表現」が、県下公立高校においてどの程度、どんな形で実施されているのかについて実態を知り、現状の問題点や今後の対策を探りたいと考えた。

(2) 調査方法——愛知県下公立高校110校校を対象として、下記のアンケートを郵送で依頼し、回答された(回収率90%)105校分の資料を集計し整理した。

(3) 調査時期——59年度第1学期末(7/18~31)。

「国語表現」の指導に関するアンケート

1. 貴校では「国語表現」を59年度の教育課程の中にとり入れていますか。とり入れている場合は、該当学年、全員が希望者か、週何時間か等について、とり入れていない場合は60年度以後の実施予定について、それぞれお答えください

ア「入れている」→  年生 { 全員必修  
希望者選択  
週 ( ) 時間 (標準は2)

イ「入れていない」→60年度以後 { 入れる  
未定  
(1.でアの場合、以下の問いにお答えください)

2. 「国語表現」担当の先生は何人ですか。一人で何クラスを担当していますか。

( ) 人。 一人で ( ) クラス。

3. 「国語表現」指導計画において、実際に作文させる指導は年間に何回ですか。すでに1学期中に何回実施しましたか。その場合、テーマはどのようなものですか。

年間 ( ) 回の計画。  
すでに1学期中に ( ) 回実施  
テーマ

4. 成績評価は何に基づいて行いますか。  
ア. 作文による。  
イ. 「現代国語」と同様に読解・鑑賞中心のテストによる。  
ウ. 作文とテストとによる。

以上

(4) 調査結果

<1. 59年度教育課程での扱い>

ア「入れている」 52校

イ「入れていない」 53校

- ・「60年度以後入れる」 4校
- ・「60年度以後も入れない」 2校
- ・「未定」 47校

(「入れている」52校について)

- (ア)対象学年 ①3学年 40校 (79%)  
②2学年 7校 (12%)  
③2～3学年 3校 (5%)  
④不明 2校 (4%)

- (イ) ①必修 (全員, コース別) 27校 (52%)  
②希望者選択 23校 (44%)  
③不明 2校 (4%)

(ウ)単位数 (標準は2)

- ・1単位 5校 (9%)
- ・2単位 43校 (83%)
- ・3単位 4校 (8%)

<2. (ア) 担当教師数>

- ・1名 21校 (40%)
- ・2名 15校 (29%)

- ・3名 9校 (19%)
- ・4名 5校 (8%)
- ・5名 1校 (2%)
- ・6名 1校 (2%)

(イ) 1人当たりの担当クラス数

- ・1クラス 24校 (45%)
- ・2クラス 14校 (27%)
- ・1～2クラス 2校 (4%)
- ・3クラス 2校 (4%)
- ・2～3クラス 6校 (12%)
- ・1～3クラス 1校 (2%)
- ・4クラス 1校 (2%)
- ・5クラス 2校 (4%)

<3. (ア) 年間計画における作文の回数>

- ・6回 11校
- ・5回 7校
- ・8回 5校
- ・3回 4校
- ・4回 4校
- ・7回 3校
- ・10回 2校
- ・12回 2校
- ・20回 2校
- ・9回 1校
- ・13回 1校
- ・15回 1校
- ・16回 1校
- ・未定 8校。

(イ) すでに一学期中に作文を実施した回数

- ・2回 14校
- ・3回 11校
- ・1回 10校
- ・4回 6校
- ・0回 3校
- ・10回 2校
- ・5回 1校
- ・6回 1校
- ・7回 1校
- ・13回 1校
- ・15回 1校。

(ウ) 実施した作文の種類, テーマ

- ①読書感想文 9校。②「進路」, 「私の未来」等 7校。③「自己を語る」, 「自分史」, 「私」等 7校。④手紙・葉書 6校。⑤遠足・研究旅行等 5校。⑥教材に対する批評と鑑賞 5校。⑦日記 5校。⑧「学校生活」, 「青春時代」等 4校。⑨「学校」, 「私の学校を紹介します」 2校。⑩新聞記事を題材とした意見文 2校。⑪「夏に思う」, 「夏休みについて」 2校。⑫「忘れ得ぬできごと」, 「印象的なできごと」 2校。「人権と平和について」, 「表現の自由について」, 「学ぶことの意味」, 「読書より得たもの」, 「わが郷土」, 「わが家族」, 「私の生き甲斐」, 「母について」, 「日本人の生活」, 「日本語を考える」, 「四季について」, 「美しいもの」, 「友情」, 「貧しさと豊かさ」, 「自然」, 「花」 各1校。

<4. 成績評価の主な方法>

- ①作文と「現代国語」式のテストによる。 33校
- ②「現代国語」式のテストによる。 9校
- ③作文による。 7校
- ④その他 (語学力養成のプリント等と教科書の読解力を合わせたテスト, 作文と基本練習ノート)。 2校

6. あとがき——反省と課題——

私たち三人が、初めての「国語表現」を一年間指導

して、特に強く感じたこと、反省させられたこと、そして今後、検討してゆきたいことなどを、いくつか記しておきたい。

(1) 私たちは当初、作文の事後指導や成績評価のわずらわしさを考えて、作文の回数を多くすることには消極的であった。しかし、一年間の指導を経て、結局、実際に書き、話す学習活動の機会を多く設けることがこの科目にとって最も重要であることを再認識させられた。教科書に頼って、読解や鑑賞の指導にとらわれていると、科目の目標があいまいになり、生徒の興味、意欲を失わせるおそれがあることもわかった。

紙面の都合で、生徒作文の実例を載せられず残念だが、手紙文、小論文、スピーチ用原稿等、生徒の文章を何回か添削して、その都度、生徒それぞれの表現力が確実に向上していることを認めることができた。また、スピーチを体験させることによって、話すことへの興味、関心を喚起することもできた。要するに、生徒自身の主体的な表現活動を促すことが指導の鍵であると言えよう。

(2) 「話す」こと（スピーチ）の指導に積極的な意義

を、見出しえたが、今後は、日常、軽く見られがちな「聞く」ことの指導をも重視して、「話し上手」と同時に「聞き上手」となるように心がけさせなければならぬと思う。

なお、書く・話す・読む・聞く等の言語活動を、なるべく有機的に関連づけて指導することが効果的であり、また、ものをしっかり考える力をつける指導になると思われる。

(3) 第1学年の「国語Ⅰ」、第2学年の「国語Ⅱ」での表現指導と、第3学年の「国語表現」の指導とを関連させるならば、かなり効果をあげうるものと思われる。全学年にわたっての（本校の場合、中学も含めて）系統的な指導のあり方を展望しながら検討を進めたいと考える。

(4) 私たち三人の担当者が、協議を重ね、歩調をそろえて、拙いながらも指導計画から成績評価に至るまで、一年間の指導を展開し得たことにより、今後の指導に向けて、ある程度の自信が得られたように思う。

よりよい協力体制を国語科全体で確立し、教育条件を可能な限り整えることが今後の大きな課題である。